

山下佐知恵が影武者を務めている間、香西梨花本人は安全な場所に匿われて平輝美から渡されたテキストで猛勉強していた。半ば軟禁状態のため否が応でも涉り、却って好都合なくらいだった。

諫波探偵者社長の鈴木十七と社長代理の正兼真悟も特殊能力の持ち主である。鈴木は所謂千里眼により、失せ物探し物を発見するのを得意とし、正兼は警察関係者の間ではシャーロック・ホームズ並みの推理探偵として知られているが、その実は、テレパシーによる読心術だ。最初から真犯人も犯行の手口もわかっているのだから、容易く事件を解決してしまうのも当然である。こんな二人が動き出せば、八代光を狙う者などすぐに捕まえることができる。

山奥で修行していた光と滝口義彦と、ユス・アドコスは連絡を受けてすぐさま探偵社に戻った。社の奥まった場所に一種異様な雰囲気のある部屋がある。雰囲気が異様なのはそこが監禁部屋、即ち牢獄であるからだ。

捉えられているのは女だった。大きな椅子から鎖に繋がれた手枷足枷がその女をしっかり拘束している。

「あれは……」

輝美が目を見張った。

「魔人党ビルラカの副将ミレディス・アイドラだわ！」

「何者なの？」

と、佐知恵。

「ミレディスは他の党員と違って魔力は持たないけれど、類稀な知略と狡猾さで副将にまで昇り詰めた女よ。彼女が考案した、証拠を残さず人を殺したり盗みを働いたりする『完全犯罪実行システム』は『ミレディス・システム』と呼ばれて、様々な依頼者から仕事を請け負っているわ」

「なるほど、狙撃のような暗殺も御手の物というわけね」

現実に狙撃された佐知恵が額を指で摩った。

「さてと、こいつをどうしたものか」

鈴木社長が腕組みしながら呟いた。

「知れたこと。この場で斬り捨てます」

ユス・アドコスの言葉に全員が息を呑んだ。

「此奴はこのまま生かしておいてはためになりませぬ。速やかに始末致さねば後に禍根を残すこととなります」

「しかし……」

光は逡巡した。

「案ずるには及びませぬ。ミレディス・アイドラはこのユス・アドコス同様、本来地球には存在しないはずの人間です。存在しない者が消えたところで問題はありませぬ」

ユス・アドコスは光に向けて剣を突き出した。

「これは光殿の御役目と存じます。悪しき因縁は御自身で断ち切らねばなりませぬ」

光は両手で剣を握り締め、ごくりと喉を鳴らした。

「まずは首を切り落とし、脳天を叩き潰します。さあ、若、どうぞ」

光は鞘から剣を抜き、震える両手で構えた。

「梨花、わたしたちは外しましょう」

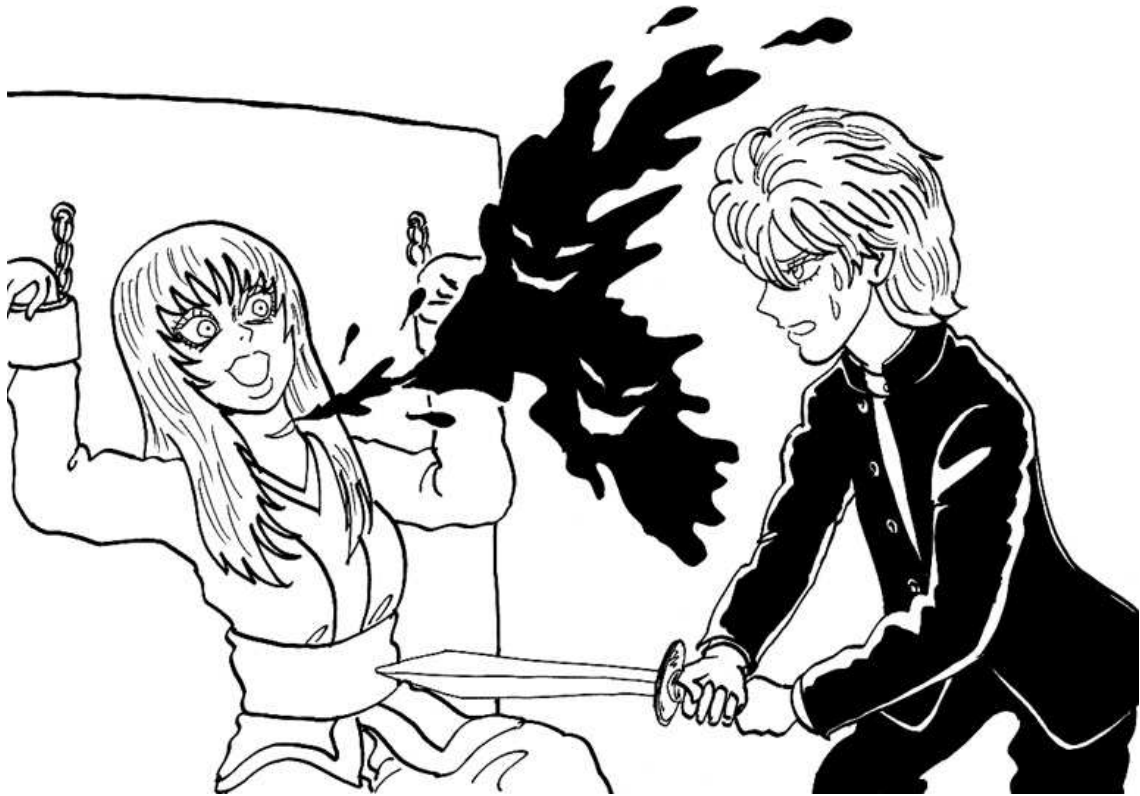
彼女の肩に載せた輝美の手も震えていた。二人は黙って部屋を出た。佐知恵も後に続く。残った者達は固唾を飲んで成り行きを見守った。

光は固く目を閉じたまま剣を振り払った。

「甘い！」

ユス・アドコスが眉をひそめた。ミレディスの首筋から黒い液体が飛び出し、光の顔に降りかかった。その液体は粘り気を持ってあたかも覆面の如くに光の頭部を包んで覆

った。



「勝った！ わたしの勝ちだ！」

ミレディスが叫んだ。斬られた傷はすぐさま塞がった。

「もう随分昔の話だけど、わたしはたった一つだけ魔法を教わっていたのさ！ 誰からかわかるかい？ 魔女ディメアだよ！ キャハハハハッ！ そうさ！ あんたの母親さね、光！」

けたたましい笑い声を聞いて、女性たちが部屋に戻って来た。

「えっ？ 光のお母様はメアディでは……？ ……メアディ……ディメア……？」

輝美が忙しく視線を彷徨させた。

「そうさ！ そんなわかり易い並び替えなんて、全く人をおちよくってるだろ？ 第二王子の夫人ヨビナ・メアディなんて女は存在しない！ 全てはカダン・トルティメロを欺き陥れるための策略だったのさ！」

ミレディスはまたぞろ奇声を発して嘲笑した。

「だが、間抜けなあんたの親父も、戦士としては立派だった。あの恐ろしい妖怪、首領のビルラコル・ドムンク様を倒すために、己の命という高い代価を支払ったのだからね。それに比べてあんたはどうだい、光！ わたしをきっちり殺せなかったね！ 一撃で仕留めていればこの魔法は不発に終わっていたものを！ この勝負、わたしの方が分が悪かった。仕掛けは用意してあったが、後なあんたの出方次第だったんだからね。でも、あんたはただ剣を振り下ろすだけでよかったのにビビっちまった。逃げちまったんだねえ、この意気地なしが！ こういうのは逃げた方が負けなんだ！ わたしが勝てたのは、あっさり殺られちゃうかもしれないというリスクを冒して、果敢に賭けに挑んだからこそなんだ！ だから、勝利の女神はわたしに微笑んだ！ それに引き替えこの坊やは躊躇い、恐れ、そして、仕損じた。勝負に負けたお前はもうわたしのものだ！ こいつはもうわたしの言うことしか聞かない。わたしのペットだ！ そして、食欲、性欲、睡眠欲だけのケダモノだ！ わたしの小便を飲み、わたしのクソを食い、いつだってわたしとやりたくて仕方がない本能だけの動物さ！」

「てっきり冥府魔道に陥れて仲間に引き入れるものと思っていたが……こんなことをして何の意味がある？」

ユス・アドコスが険しい眼差しでミレディスを見据えている。

「意味はあるさ！ 冥府魔道に陥れて何とする？ 邪悪の戦士か？ 暗黒の妖術師か？ 冗談じゃない！ 誰がそんなカッコいい役回りなぞさせてやるもんか！ 最低最悪のクズとしてわたしの足下で這い蹲らせてやるんだ！ わたしを抹殺する千載一遇の好機にグズグズとモタついたコイツに相応しい結末ってわけさ！ さあ、光！ こっちへおいで！ わたしの足をお舐め！ オシッコを飲ませてやる！ 何だい、お前？ 股間がピンピンに TENT 張ってるじゃないか！ そんなにわたしとやりたいのかい？ そんなにわたしのおまんこが欲しいのかい？ ほんとにお前ってヤツは意地汚くて卑しくて厭らしい子だねえ！」

あまりの口汚い言い草に、梨花は耳を塞ぎ、輝美は顔を背けた。

「もういい。そこまでだ。止めろ」

鈴木社長が何やら密教の真言（マントラ）のような言葉を呟きながら手印を切ると、ミレディスと光は気を失い昏睡状態となった。正兼と滝口が簡易ベッドを運んで来て、光の身体を横たえた。

「こいつが掛けた魔法はおそらく、魂を肉体から分離させるタイプのものだろう。だから、魂を身体に戻せば光くんは元通りになるはずだ」

と、社長。

「して、その方法は？ 何よりもまず、光殿の魂は何処（いずこ）に？」

ユス・アドコスが咳き込んで尋ねた。

「それをこれから探し出します」

